夢二画集
野に山に

野口雨情
詩集

東京洛陽堂

夢二画集
野に山に

東京洛陽堂

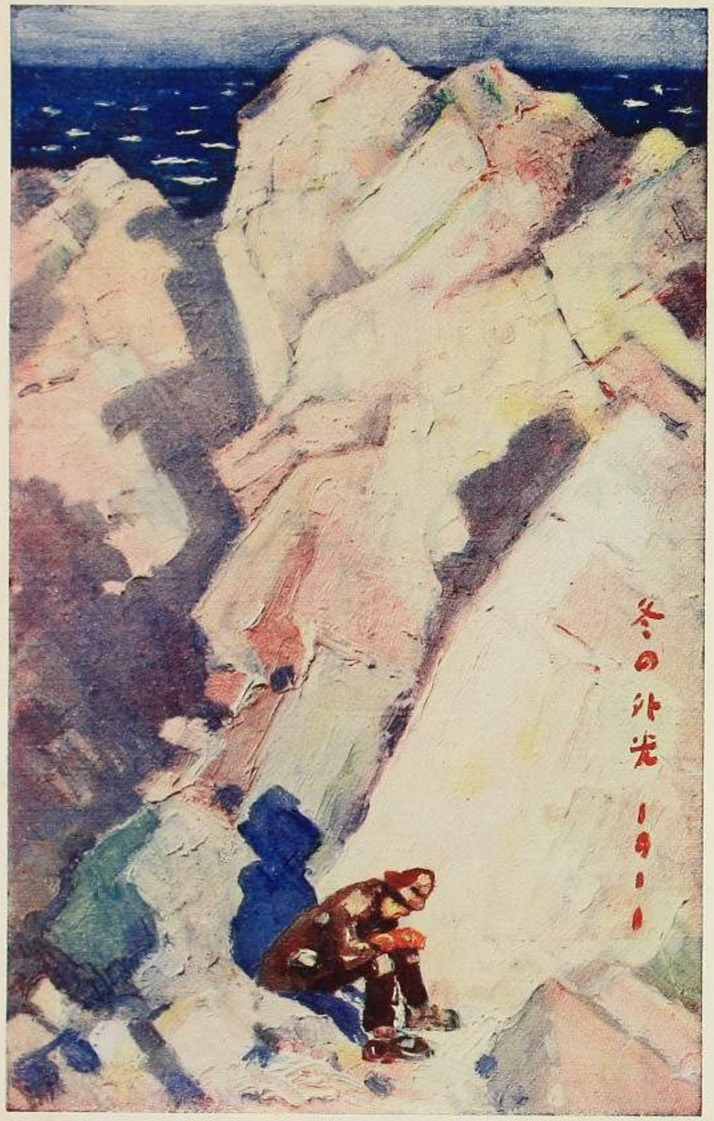
夢二畫集

野に山に

野に山に

夢二作

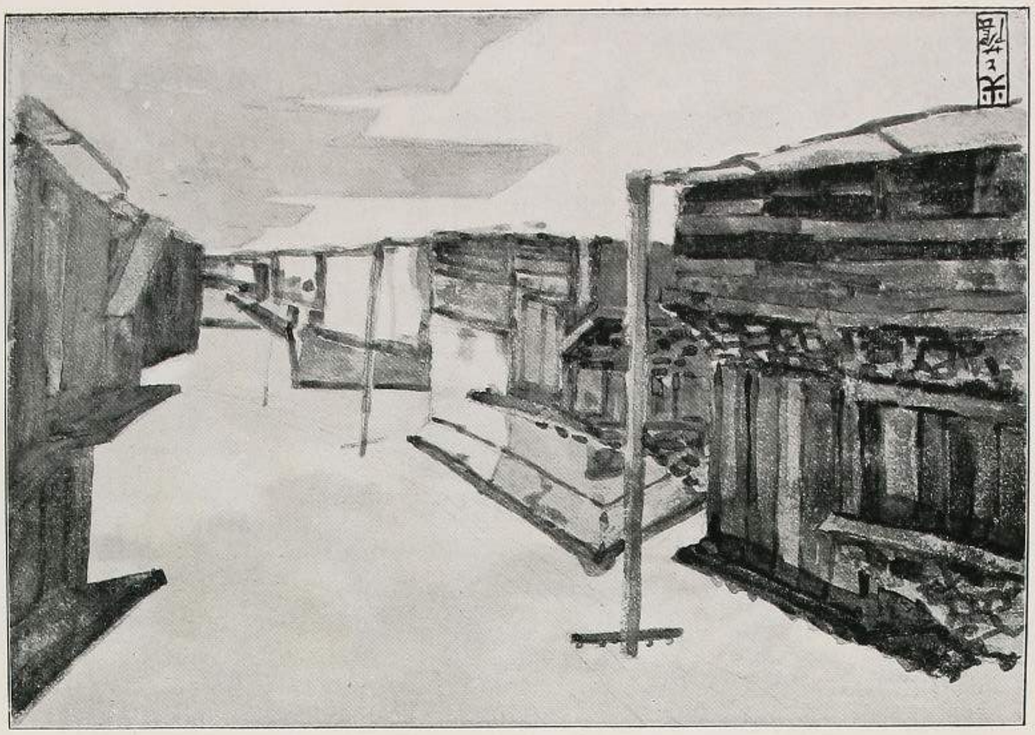
夢二畫集
野に山に

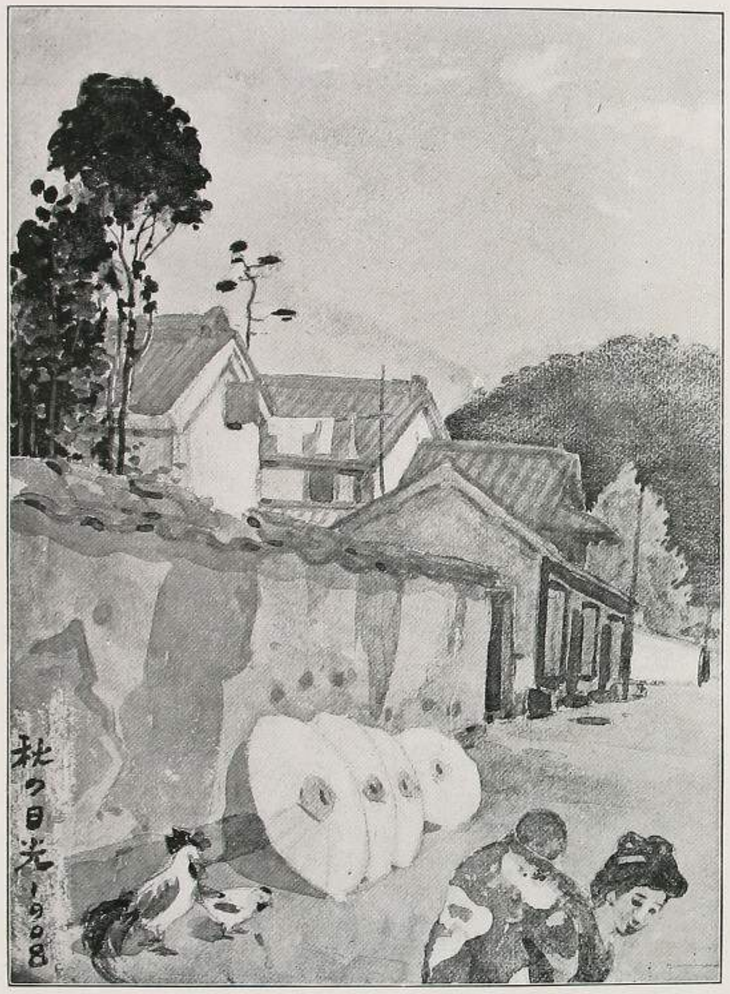

冬の夕光 1911

十二月
一九〇五

秋の光

1910
CHIYOCHIN



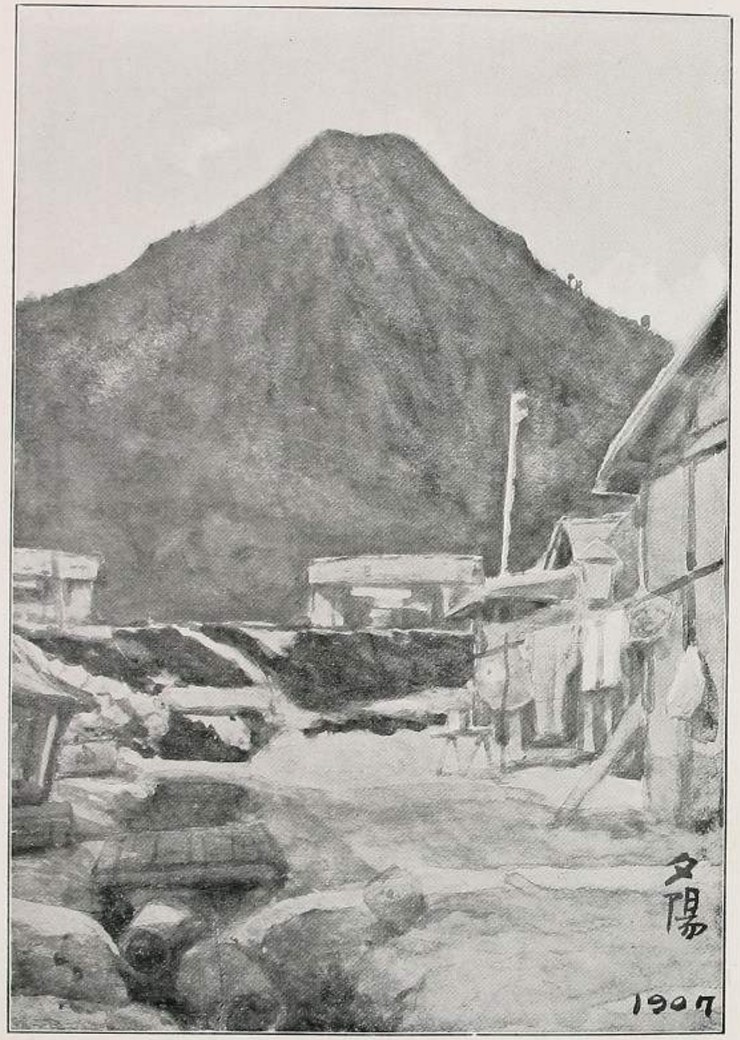

秋の日光 1908

明治の街
1909

POPLAR 1911

五月の夜
1911

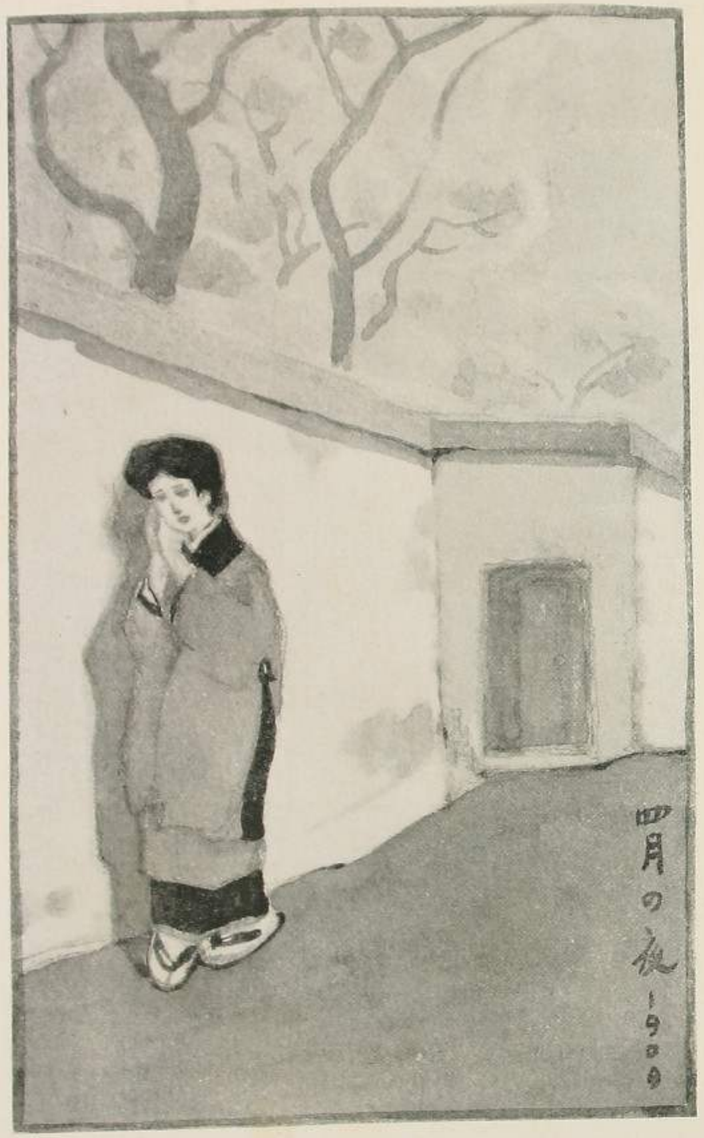
四国遍路
1908

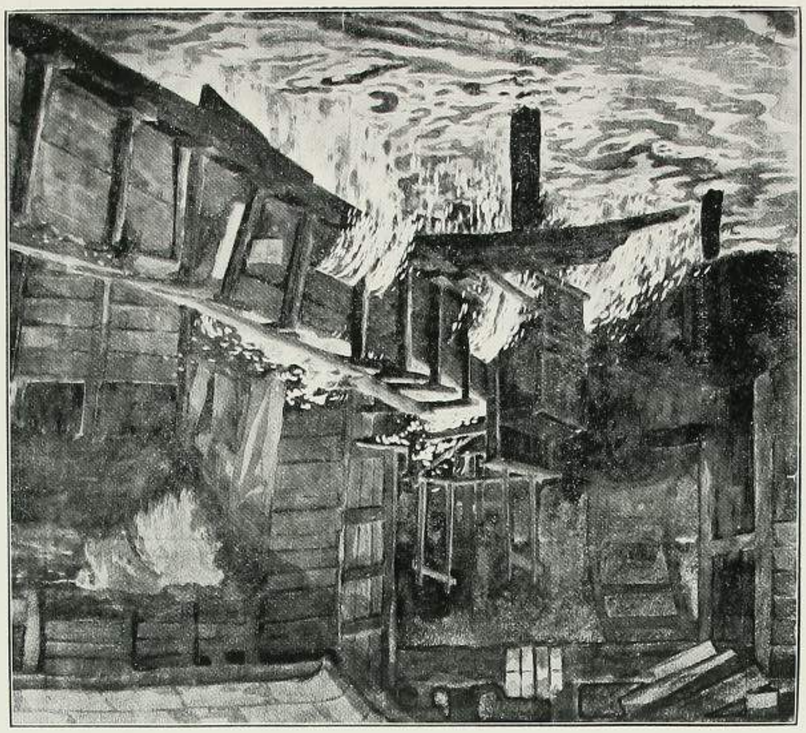

夕陽
1907

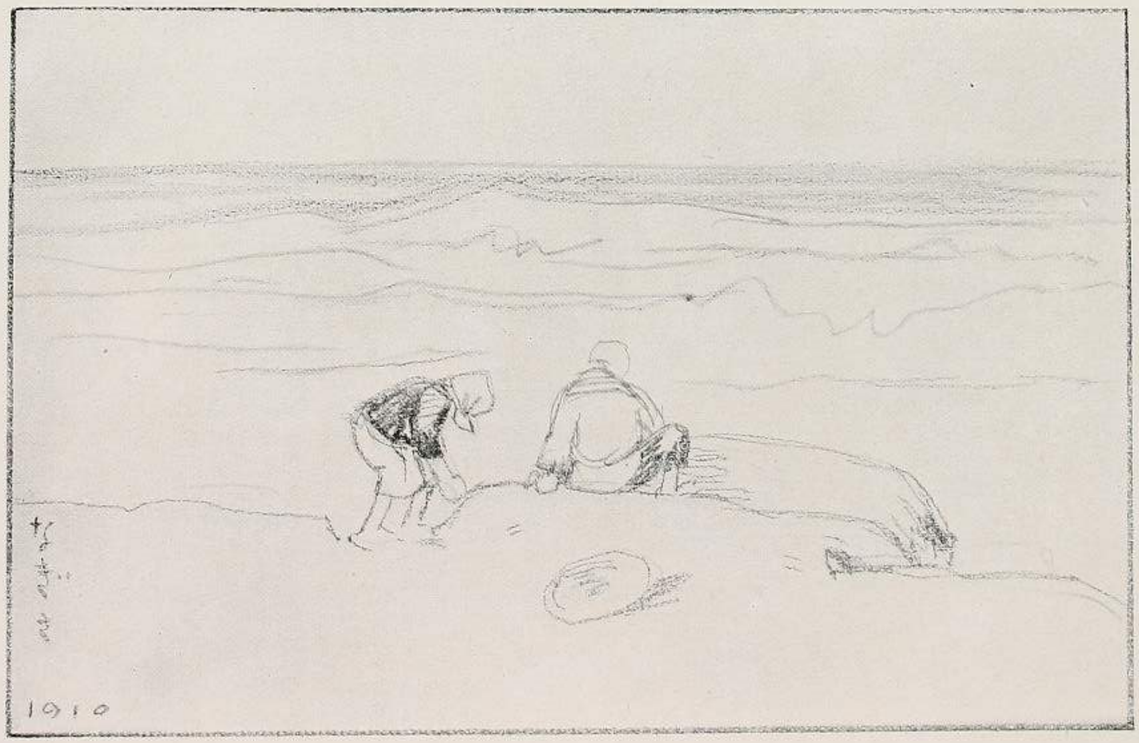
街の日光
1910

AKAITORII 1908

葉さくら


四月の夜 1900




1910

海の女 1910

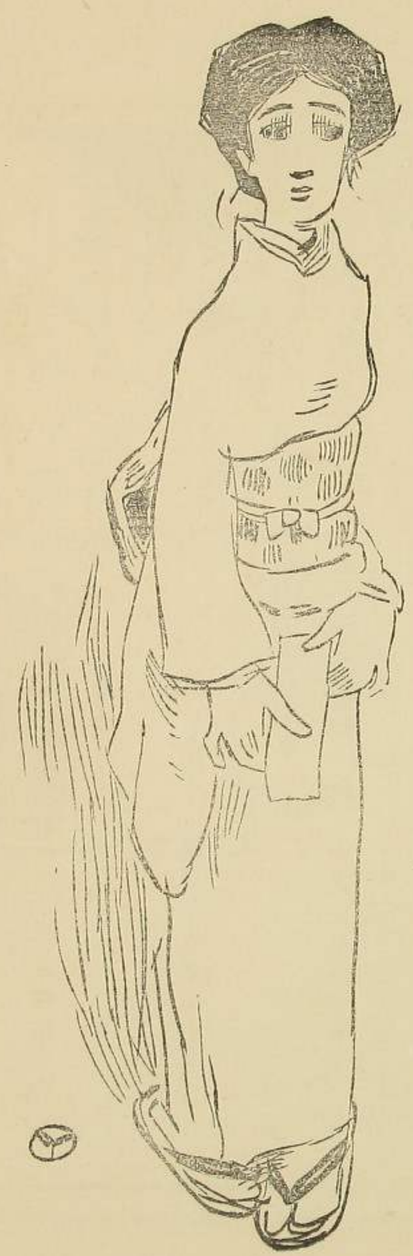
五人の男

櫻さく國の一夜

知らぬ子にまたるゝ心地、いそ〳〵と
さまよひいでし春の宵
明き窓、カーチンの艶かしさ
口笛を鳴らせど人はいでもせず
さまよひくれば
河岸の藏
眼ひとつに口ひとつ、蒼白き顏の悲しさ

チョーチンのさがれる小路
伏目にゆけば『小春より、丹様まゐる』
艶書か、知らぬ名なれど、されどよし

あゝ春の、この一夜をあだにせば
美しき子はまた得られじ。誰か囁く
灯の町を夜もすがらひとりさまよふ



『嫁く日』まで

――旅の青年と都に近き海濱の少女との對――

――ではもう嫁くことに決つたのですか！

――えエ。

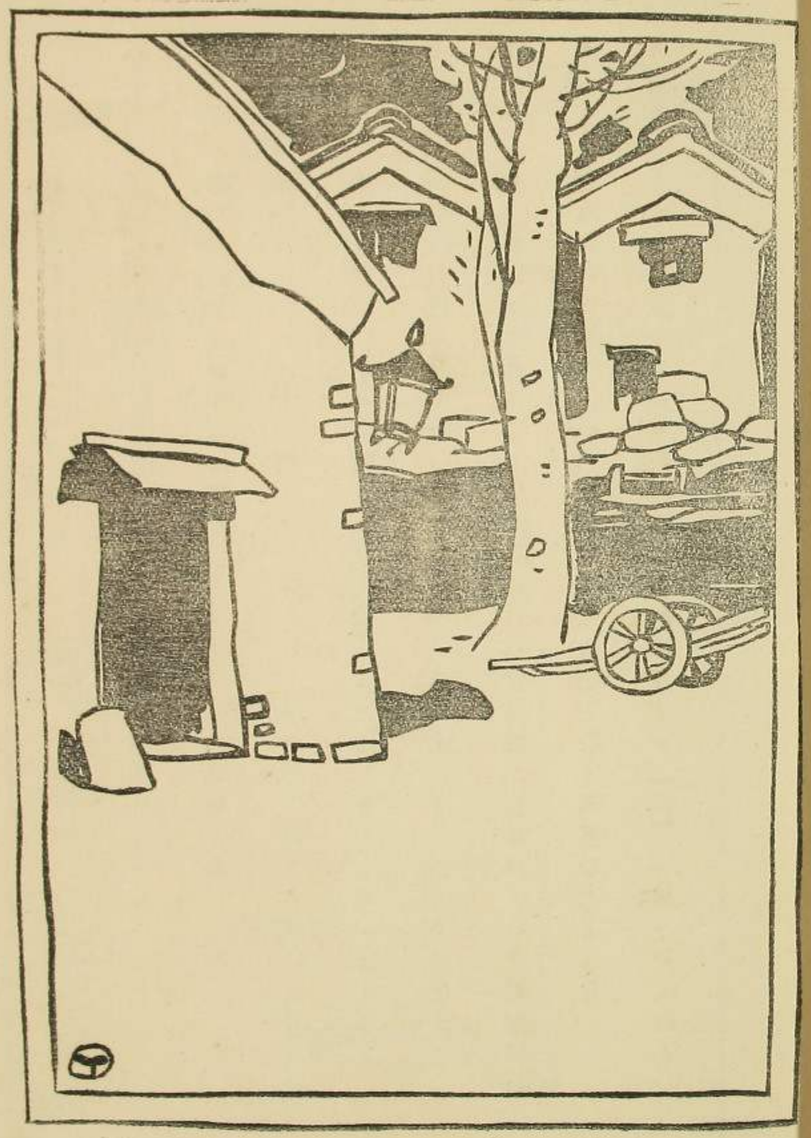
――でも卿は、どうしてもう一度逢つてきめたいことがあるつて手紙をよこしたぢやありませんか。

――えエ。

――嫁くことに決めたのなら、なにも僕に逢ふ必要はないでせう。

――えエ。

――卿のいふことは僕には少しもわからない。……兩親には『もう嫁きます』つて言つてしまつたのですか。



——えエ。

——それでは、いつも卿のいふ家のため親のために泪を怺えて肉躰を犧牲にせうといふのですか。

——えエ。

——そして、心はいつまでも〳〵僕に捧げてゐたいと言ふのでせう！

——えエ。

——ありがたう！卿の詩的な真操を感謝します。然し、ハートを桃色の狀袋に封じて送つてくれる戀人は僕には、あまりに澤山ある。折角ながら、卿のその美しい心もお返ししなくてはなりません。それではこれを永のお別にしませう。さようなら。

——あら！往つちやいや。

旅のわかれ

町の少女――悵然と客舎のうらの門にたつ若人や誰おもやつれたる

旅の畫工――君ゆゑに鐘をかぞふる悲しさと夕の星の哀を知りぬ

町の少女――海こえてレモン咲く野へいざゆかむ、ゆきてちいさき家いとなまむ

旅の畫工――旅人は野山にこそは寢ぬべけれ『家』はわびしきところとおもふに

町の少女――別れては何をたのみに生きむ身ぞ、草にすがりてこの手はなたじ

旅の畫工――春くればまた逢ふこともあるべけれさは泣くなかれ、いざや別れむ

町の少女――少女なれば別れといへば泪するならひとなりぬ笑ひたまふな

旅の畫工――さようならここの木蔭にみてあれば母すむ『家』へ早うかへれよ

青き夜の夢

―誰？ドアを叩いてゐるのは誰です。

―私。今日松原でお逢ひした女です。

―あ、お入んなさい。……然しこんな夜更に如何したといふのです。

―私、もう家へは歸らないつもりで伺ひましたの。

―それはまたどうした譯で。

―卿はいつか私に『おまえでも泣いたことがあるか』つてお聞きになりましたわねえ。その時、私はなんにもお答へしませんでしたわねえ。私が泣く所を卿に御覽にいれる時がとう〳〵參つたのでございます。

―あゝ、十年が一時に過ぎたやうな氣がする。今日松原で逢つた時『もう今日は四日ですわねえ』と聞かれて、私は御身を憎まずにゐられなかつた。『ゆるされし日』を惜しむ心と、『きたるその日』を厭ふ御身の心を、私は察してゐた。け

れど私は淋しかつた。ひとり殘されてゆく感がしたのです。けれど、十年は一時に過ぎた。今にして思へば、松原のことは異國人の書いた小説をよむやうな氣がする。

――それでその小説の後篇はどうなるのでございます。

――旅をするのです、明日が五日であらうとも、十日であろうとも、よしや一夜のうちに、『わかき日』の百年が經過しようとも、御身の腰が曲つて私がルカ老人のやうになろうとも、町から町へ、村から村へ……

――それから何處へゆくのでございませう。

――そりや私には解らない。御身にも解るまい、世界中の誰もそれを知つてゐるものはない。だから人は旅をするのです。地平線に横はつてゐるあの蒼い山の向にはもつと幸福な町があるやうに思へたり、海の彼方の椰子の葉蔭には、もつと親切な人が待つてゐてくれるやうに思はれて、夜に日をついで旅するのです。然しながら『幸福なる明日』といふ城は曾て旅人のために開かれた例がない。旅人は、幾千年の昔からおなじ目的に殘れた旅人の死骸を踏み越えては、城門に佇むで、たゝけども、たゝけども、曾て開かれぬ城の扉を叩いてゐる。

――私には、そんな旅は出來ませんわ。四日といふ日の次に五日といふ日が來、三島といふ驛路の次に沼津といふ驛路へ着くのでなくては私には――いゝえ女といふものには堪へられませんわ。

――私は時計といふものを持つたことがない。太陽が東の山にのぼれば旅人のためには晝になり。經帷衣のやうな月がさせば旅人のためには夜になる、衣をかたしけば伏閨になる……

――もう言ふて下さいますな。

――さ、それではもう別れよふ。御身は『家』へ歸つて『その日』のために柱曆をお剝なさい。一枚剝げば五日になり二枚剝げば六日になる。花が咲けば鳥が歌ひ、桃色のカーテンを引けば戀になる。御身の『若き日』のために私は蔭ながら祝福してゐませう。それでは、さようなら。

岡の記憶

夕ざれば
うつら〳〵と月見草
わがたつ岡に咲きにけり。

夕されば
しみ〴〵と手をとりて
わが胸に君は泣きけり。

夕されば
なつかしき、涙のうちに
別れてし岡こそうかべ。

砂文字

青年。（無言。砂の上に文字を記す）

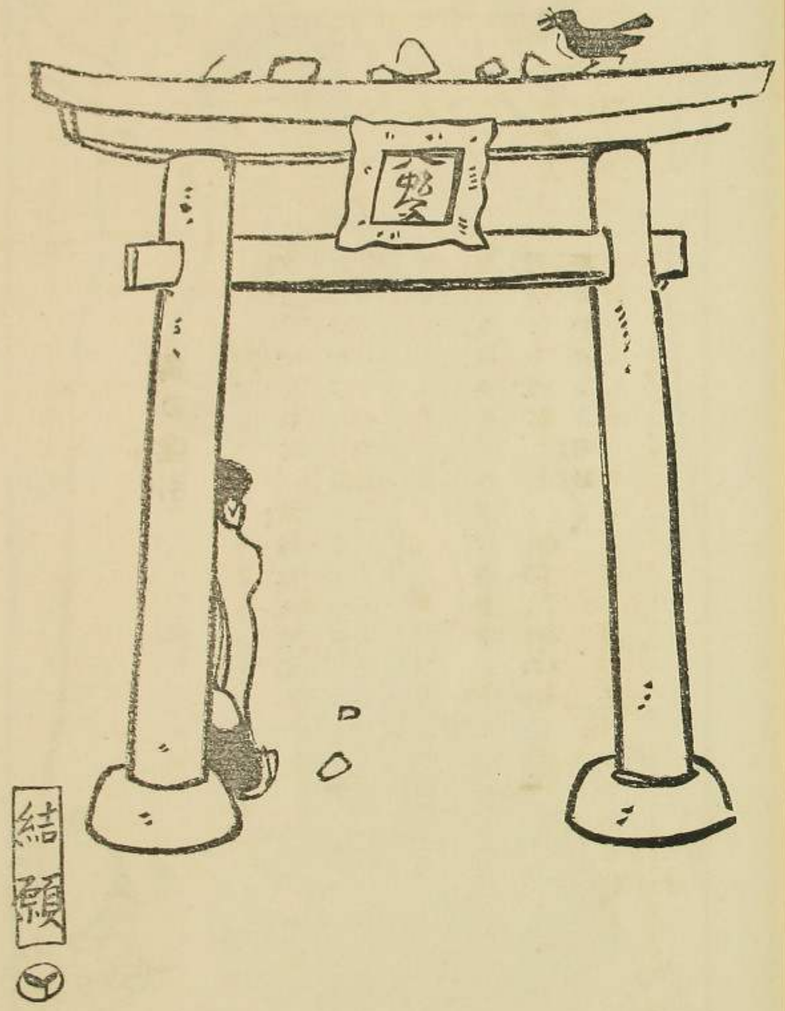
少女。（無言。羞ばみたる面持にて、砂の上の文字をたどり、心のうちにて讀みゆく）

青年。（さきの文字を消し、また砂をならして、新しき句を記し、少女の顏を覗く）

少女。（微笑む）

青年。（さきの句を消し、次の句を指に力をこめて記し。さて微笑みながら少女の横顏を見入る）

少女。（快く、點頭く）



結願

地圖の中に君住む町を見出せし待合室のたそかれの頃。
町の灯をしのびしのびてゆくは誰ぞおたづね人か勘當の兒か。
追放の客か罪得し落人か旅籠の奥の座すに泣くは。
君見むと遠く旅して來しものを宿屋の婢酒をすゝむる。
今宵ばかりにくみそねみも打忘れしみ〳〵鐘をきゝしことなし。
あなやあな半おちたる砂時計見てある心君は來らず。
裏門のうらかなしちよ君まつとそと戸にたてば物語めく。
堂守よこのあけくれに人しれず結願をする少女を見じや。
來ぬ人を思ひすてつゝ香たけば心なごみぬ鳩に豆やる。
朝の鐘みじまひおえて赤き帶むすびて君の來つゝやあらむ。

鳥の逢引

「夕日はかくれて、路ははるけし
行末いかにと、思ひぞわづらふ……」
岡のうへより我歌ひ。

「親しき友みな、さきだちゆきて
暗きうき世に、ひとりのこりぬ……」
藪のかげより君歌ふ。

姿は見えね、鳥と鳥
歌をしるべに忍びよる。

やがて櫛見え、袂見え
白き腕をあぐる時
わが歌聲の、はづむ時

君はやさしき、呼息つきて
『御胸によりつつ眠らせたまへ
とこよの朝にさむる時まで……』

明日

村の少女。もう歸りますわ。

若き旅人。そう。ではこゝで別れませう。

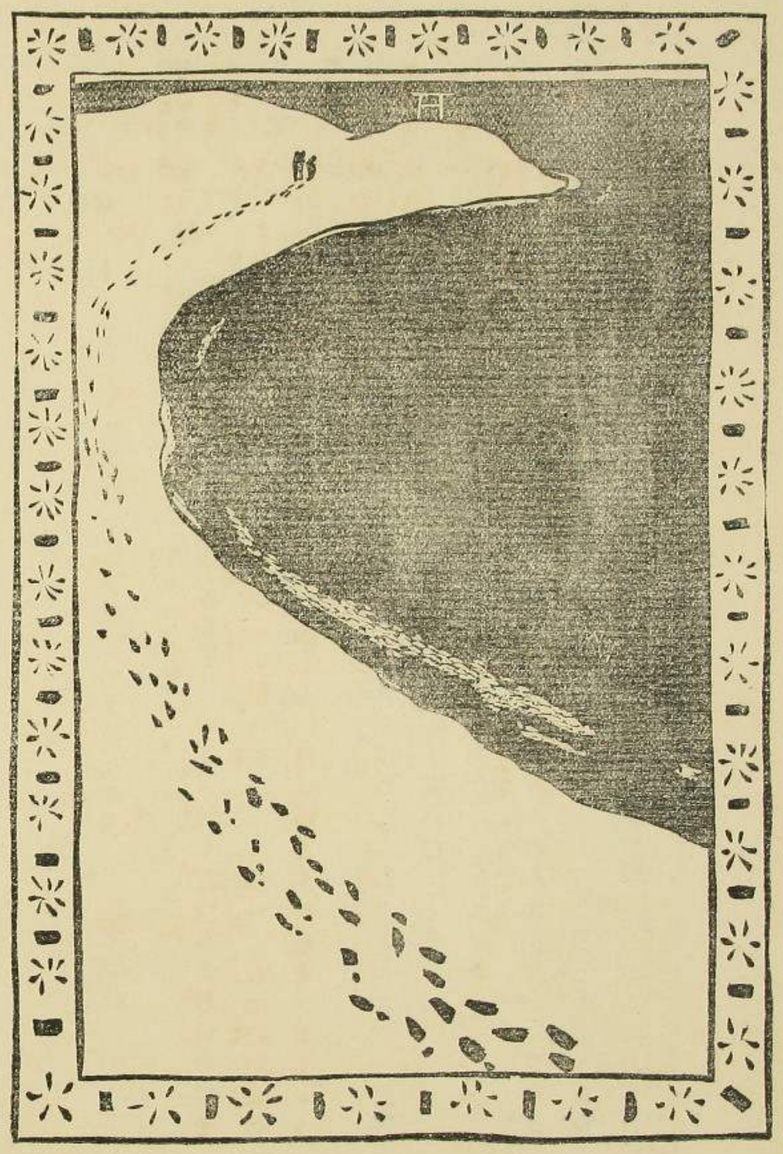
村の少女。いやよ。あすこの松の樹のそばまで、ね。

若き旅人。（默して歩む）

村の少女。（男の手袋のボタンをはめながら）だつて、二人がこうしてゐるといふことは何でもないことですわね。大きな自然の目から見れば……

若き旅人。（右手は少女の抱くにまかせ、左手は深くポケットにさし入れて歩む）

村の少女。（遠きものを夢みる心）大きな宇宙の中の、小いさな地球の上の、小いさな日本といふ島の、小いさな海邊の林の中で、小鳥のやうな男と女が手を挈合つたとて、喜むだとて、それが大きな自然の瞳瞬にさへもあたらないのではありませんか。



若き旅人。（獨りで歩む）

村の少女。　うして卿と手を挙つて歩いてゐると、かう、何と言つたら好いのでせう、まあ、言つて見れば、あの闇から闇へ限りなく連つてゐる白い渚のやうに……永久、そう永久といふことが思はれますわねえ。あらもう松の木へ來たわ。

若き旅人。永久！

村の少女。それではまた明日ね。さよなら。

若き旅人。明日！（手を解く。男の手に桃色のハンカチーフ殘る）さようなら。

（その明日の日光は、二人をこの林の中には照さなかつた）

林にて

松の樹のうらとおもてにより添ひて思ひ思ひのうれしさたどる。
樹の皮を剝ぎつゝふたり言ひしことゆめ〳〵人にもらしたまふな。
わが胸に簪ふるひ組みし手に泪こぼれぬ潮の音をきく。
泣くことが心慰になるならば泣きたまへとも泣きたまへとも。
見てあらむ泪のかぎり泣きたまへ泪つきなば口つけをせむ。
明日の日はたれか知らむや相抱く肩さへ頬さへあらば足るもの。
頬なくて黒髪なくて何にせむ忘れであれと君はいへども。
別れ路につよく握りし右の手にハンカチーフのこる詫しさ。

繪馬盜人

最初の繪馬には、こんな繪が畫いてあつた。

赤い提燈を吊した社祠のまへに、藍色のキモノを着た若い女が蹲いて、身も世もうちかけた樣で掌を合せて一心に祈つてゐる所が畫いてあつた。

呉粉を塗つた女の襟足の白と、月夜烏の翼のやうな頭の毛の黑との色調の快さ。華奢な首筋をコバルト色の半襟が柔かに卷いて、そのうへを、黑い縞子の襟が曲線を畫いて肩から胸へ――ふつくらともりあがつた年頃の女の乳のうへを、心もちひきしめて帶の間へ流れる。牡丹の花を派手に染めた赤い帶を、きゆつと結んだその下につゝましうそろえた素足は、道すがら、まだ朝露の消えやらぬ櫻のやうな薄紅。わきに小いさく淡墨で『十九才女』と認めてある。

その色彩が心を引いたのだ。

百夜の願を神にかけた、その第一夜――

月の暗い宵のこと。

少女は、生みの母親にさへ打明けられぬ、悲しい――美しい願をば、この繪馬に心こめて、人知れず御堂の棟にこの美術的な奉納をするのであつた。

うき人の世に少女と生れ、生涯を通じてたゞ一度おぼえそめるといふこの美しい願事を、神のみが聞召すといふのがいかにも妬ましかつたのだ。

そこでその繪馬を、密かに持去るといふことが、やかで少女の運命に何等かの關りを持ち來すと、自分には考へられたのだ。

それが眼から入る色彩より以上に自分の心を滿足させることが出來た。

それから。

自分のこの墓ない願が、もつと具象的に叶へられる時が來た。

ある日。

それは娘の滿願の日だつた。貧しい年老ひた女が私を訪ねてきた。許された願のために奉納する繪馬を自分に畫いてくれといふのであつた。

自分はまだ釋迦如來といふものを畫いたことがなかつた。けれど誰が眞の釋迦を見たものがあらう。自分は自分の心に描かれた釋迦を畫けば好いのだ。娘のためにはその願を叶へたまふた主上のみがその釋迦である。とさう考へた。

そこで、まばゆひ御光につゝまれて摩耶山から下降する釋尊のまへに娘が跼いてゐる所を、言ふがまゝに畫いてやつた。

老女の後に小さく寄添ひ、嬉しげに歸りゆく娘の後姿を見送つて、心ゆく微笑を禁じ得なかつた。

今でも、榎町なる釋迦尊の御堂のうちに、この思出の多い繪馬は掛けられてゐる。

願許れたこの娘は、今は何處にどうしてゐることやら知るよしもないが、あの時の後姿を思浮べると、また新なる願をかけて、自分に額の繪を賴みに來るやうな氣もする。

柵

處女『あら、そこから入つちやいけない！いけない！』

青年『では、どうして入るんです。外に入る路はないじやありませんか』

處女『だつて……』

青年『岡を繞つて門から入れつて言ふのですか。その間御身はこゝにひとりで待つてゐますか』

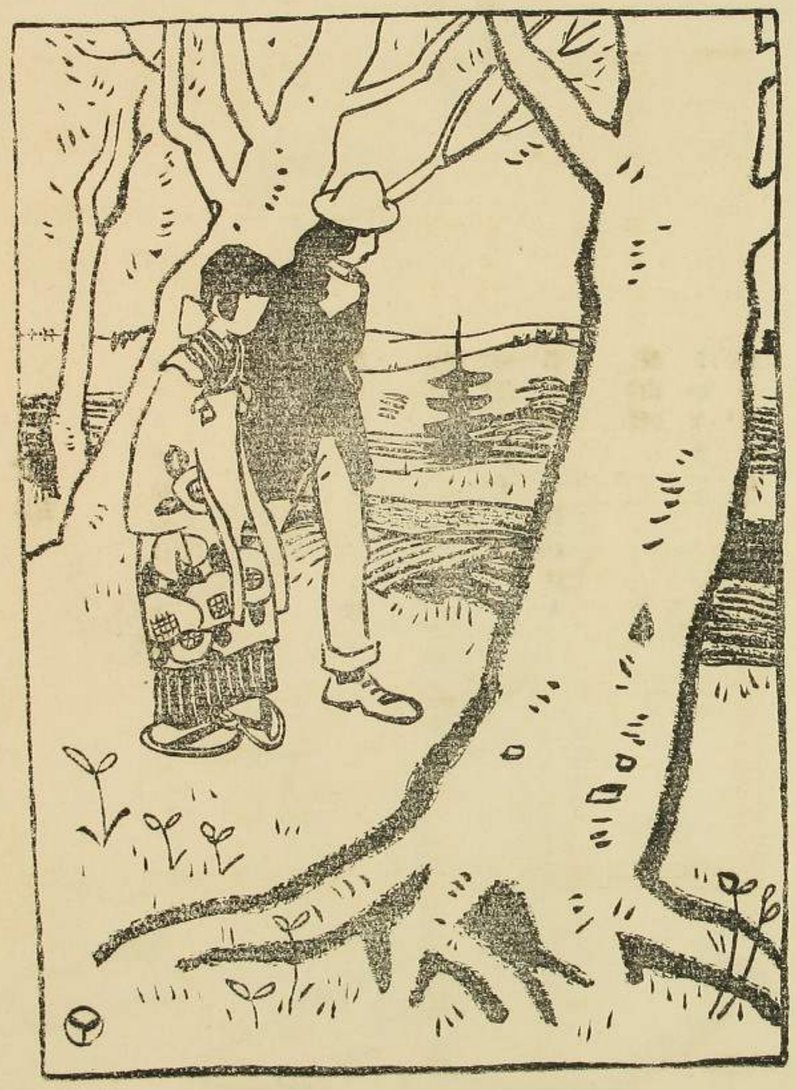
處女『そりやいやですわ。こゝで卿に逢ふまでに、私はまあどんなに恥かしい目をしたことか、どんなことがあつてもこの手は放さないわ』

青年『それじや、この柵を越えませう……』

處女『いけない！　いけない。こゝから入つちやいけない』

顔見ては言へぬ事

『顔見ては言へぬこと』ゆえ松の樹のうらとおもてにもたれて言ひぬ
燈臺に灯つきしに若人は伏したるまゝに岩をはなれず
この岡に君を見ぬことはや五日怨言葉も歌になりけり
悲しさは窓の障子のいつまでもまてどくらせど明かぬたそかれ
若人は馬こそよけれ忍寄り窓の外より口つけをする
戀人はすこしはなれて横座り摘みたる花を束にするなり
『いつまでも』少女は言ひぬ『死なであらば』若人言ひぬ棧橋の上
『これをもう永の別れとおぼせ』との手紙届きぬ船の出る時



山路

—あの木の枝に括つてある布片は何でせう？

—あれは八十八ヶ所の靈場をまはる遍路の衆の道しるべさ。

—友禪の振袖をちぎつてさげたやうな赤いのや、喪服の樣な白いのや、尼樣の衣の片のやうに黑いのや、支那の海を渡る帆のやうに黃ろいのもあるわねエ。

—あゝして、まぎらはしい山道や、別れ路へ來た時に遍路の衆の迷はぬやうにさげてあるのだ。

—そんなら、あの片を別な木の枝へ括つておいたら遍路の衆はきつと路を迷ひますわねえ。路を迷ふたら何處へゆくのでせう。

—靈場のかはりに町へ出るだらう。

—赤い灯のついた町へ出たら、遍路の衆はどうするのでせう。

—信向の高い遍路は赤い提灯をも拜むだらう。

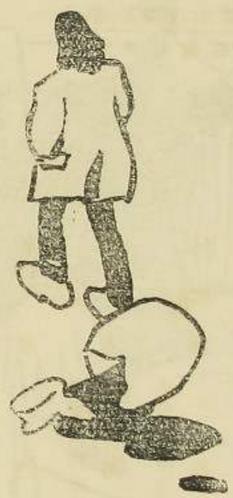
忘却

スケッチ帖のはしり書き

桃割の子
ローマの子
顔ばかりならべる悲しさ

相見し子
相逢ひし子
名も聞かで別れけり

幾山河
さかりきて
暮れぬ。



明治四十四年二月廿一日印刷
明治四十四年二月廿五日發行

發行部數
（百一——五二千）

著者　竹久夢二

東京市麻布區麻布町二丁目二番地

發行者　河本龜之助

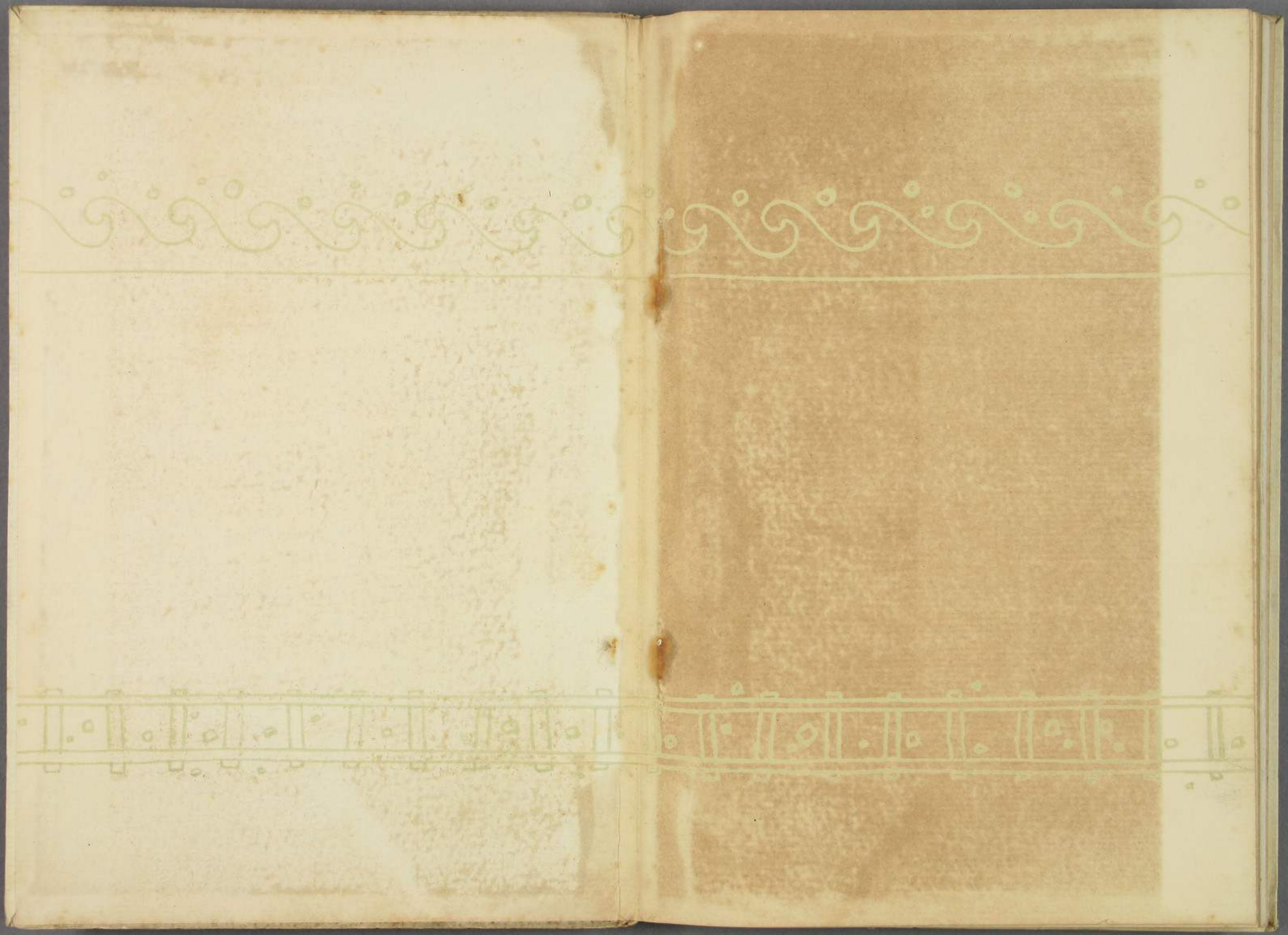
東京市淺草區龜岡町二丁目九番地

印刷者　藤田千代吉

東京市麻布區麻布町二丁目九番地

印刷所　千代田印刷所

發行所　東京麻布區麻布町二丁目二番地
電話番號東京二〇九一四

洛陽堂

定價七拾錢